

陣屋町の形態と構造について

— 近江高島郡大溝陣屋の場合 —

矢野 司郎

一 はじめに

近世に成立した都市とりわけ城下町については、歴史地理学をはじめとした関連の諸科学によって、さまざまな性格が明らかにされてきた^①。前近代都市として重要な役割を果たした城下町の多くは近代都市としても存続したし、また、中心地としての意味あいも大きかったと考えられたことが、研究の対象として、これだけ多く取扱われてきた要因であろう。そして、そのなかで城下町プランやその形態的側面、明治期になつての近代都市として再出発した時点での問題点などが、これまで多方面から分析がなされてきたのである。

近世城下町の注目すべき性格をこれまでの研究史のうえから整理すると、以下のようなことがいえよう。第一の性格として指摘されるのは、封建領主によつて建設された都市計画であるということである^②。つまり、自然発生的に成立した集落ではなく、極めて人為的に造られた集落が城下町ということである。いわゆる城下町といわれるもの建設期は、一六世紀の後半から一七世紀にかけて集中しており、城下町はそのことをみても幕藩体制を象徴する都市

といえよう。そして、第二の性格として指摘されるのは、その都市計画の際に侍屋敷地区の配置が重要な要素として取上げられることである。しかも、侍屋敷地区は一般に土地条件などからみて有利な場所を占有していた^③。

さて、城下町とよく対比される陣屋町とはどのような性格をもつ集落をさすのであろうか。本来、陣屋は戦時または軍事演習の際に将士の宿営する臨時の宿舎をさす。あくまでも臨時の戦闘陣地なのであって、城主が住む半永久的な施設である城郭とは区別されるものであった。しかし、近世には幕府の郡代・代官などの地方支配の役所、高禄の旗本の居所、藩の飛地領支配のための役所、大藩の重臣の居所、大名のうち家格上で国持や城主あるいは城持でないものの居所など、極めて広範囲に陣屋という用語を適用している^④。例えば、日本城郭体系の北海道編では、幕藩体制末期に設けられた洋式の台場までも陣屋と称しており、中林保が研究対象とした鳥取藩領内に発達した家老級の居所も陣屋町である^⑤。城下町とまぎらわしいのは、家格上で城持となれない小大名の居所であろう。国持や城主でないために本格的な城郭を築くことができず、そのために陣屋を造った。そして、場合によってはその中心として計画的な町を建設したのである。本稿では、そのような陣屋を中心としてプランされてきた町を陣屋町と呼ぶことにしたい。

ところで、城主に準じる大名が陣屋を構築した場合、先に示した城下町の特質である二点は陣屋についても当てはめることができるのではなからうか。たとえ小大名といえども領域の中心を定める場合、その立地は自然発生的集落であったとは考えられず、軍事的配慮も含めた人為的な配慮がなされたであろう。また、町といえるような規模までになった場合は、当然、領域の首都としての計画的な陣屋町プランがなされたであろう。例えば、武士階級が支配階級であった封建時代であるから、その居住地区である侍屋敷地区の問題などは陣屋町建設に当たっても、第一に考慮

にいれなければならなかつた問題であるはずである。もちろん、その陣屋町の立地にしても、プランにしても、その性格から考えて自ずと城下町と基本的に共通する部分が多いものもあることが予想されるのであるが、さまざまな社会的要因や財政能力が小規模のために異なってくる部分があるのであると思われる。本稿では近江国高島郡大溝陣屋町を中心に取上げ、陣屋プランの一事例として陣屋町建設はどのような状況で行なわれ、また、その規模や機能はどのようなものであつたかについて考察することを目的とする。

二 陣屋町の成立とその立地

近世の近江盆地には、彦根や膳所・水口などを藩領の首都とする町の規模が比較的大きい城下町と、一万石級の小さな石高からなる城主格には属さない堅田・三上・西大路・山上・宮川・小室など、いうならば陣屋格の大名の所在地が存在した^①。近世において、現在の関東地方や近畿地方などの地域は非領国地帯と呼ばれて、特定の一つの藩領に属さない地域が広がっていた。近江盆地もその非領国地帯の顕著な例であつた。盆地内を一つにまとめるような巨大な藩は存在せず、小さな藩が錯綜し、天領が多く、藩領も準天領的性格をもつていた。近江盆地では図1のように、藩が入封・交替・廃藩という変遷をたどつたが、城主格の大名は全て基本的に交替することの多い譜代大名である。非領国地帯に陣屋格の大名の分布が集中することは、すでに中島義一の報告がある^②が、表1をみれば、その中でも近江盆地は奈良盆地とともに陣屋格の大名の最大集中地域であつたことがわかる。これらの陣屋格大名の所在集落は、それぞれの盆地内における交通の分岐点・要衝に立地する傾向を示し、人口規模も比較的大きなものに発達した事例が多い。そして、享保年間（一七一六―）以前の対比的早い時期に置かれた陣屋では、大溝のほか、小室・仁

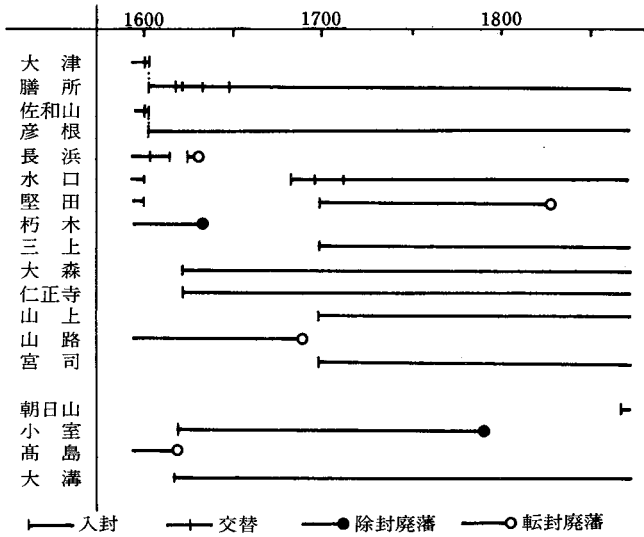


図1 近世における近江盆地の大名変遷

正寺など中心性をもった集落、あるいは中心的役割を果たした集落と結合したものが見出せる。ただし、それぞれの藩領の分布は、表2のように非領国地帯の性格上、相給・分散を特色としている。また、近江盆地内で封建領主と無関係に発展した人口規模の大きい集落には、大津・長浜・近江八幡・日野などがあるが、いずれも信長・秀吉の時代に城下町として計画された都市であることは注目できる事象であろう。

大溝陣屋町は近江国高島郡勝野（現滋賀県高島町）にある。明治一二年（一八七九）の『共武政表』によると、表3のように、男子人口一〇七九人、女子人口一一五二人、総人口二二三一人で、戸数四七九戸を数える³⁾。近江盆地の中では一番目、湖西地域では今津をしのぐ最大の人口規模の集落であった。そして、現在も今津と並ぶこの地方の大きな中心集落である。表3に示したように、人口規模からみると、

同じ盆地内の彦根や長浜・水口・膳所などの城下町には遠く及ばないが、仁正寺・山上などの陣屋町と比較すると飛抜けて大きいことがわかり、他の陣屋格大名の居所の所在地に比べて城下町に性格がよく似ている。

また、表4のように、明治一三年（一八八〇）の『滋賀県物産誌』から総人口に対する士族人口の割合をみても、

表1 陣屋格大名の国別分布表

地域	旧国名		慶長19年 (1614)		貞享元年 (1684)		享保17年 (1732)		文化10年 (1813)		明治2年 (1869)	
	陣屋格	大名数	陣屋格	大名数	陣屋格	大名数	陣屋格	大名数	陣屋格	大名数	陣屋格	大名数
東北	陸奥	陸出	1	8	3	16	5	17	6	18	7	19
		奥羽	0	3	2	9	2	11	3	12	5	14
関東	下野	下上	2	13	4	9	3	7	3	7	6	9
		上常	6	11	4	7	3	9	4	9	4	9
		下上	6	13	4	8	5	9	6	10	7	12
		下上	3	7	2	5	4	8	4	7	4	8
		安武	0	3	0	2	1	4	1	5	8	12
		相模	1	1	1	2	1	2	2	3	3	4
		相模	2	4	3	6	4	7	3	6	1	4
中部	甲斐	駿遠	1	1	2	3	0	0	0	0	0	0
		三尾	0	1	0	1	2	3	1	2	0	1
		美飛	2	4	1	3	2	4	2	4	1	1
		信越	1	7	2	8	1	7	2	7	4	10
		越前	0	3	0	1	0	1	0	1	0	2
		越前	4	13	1	6	3	8	3	6	4	9
		越前	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		越前	0	6	3	11	2	10	2	8	3	11
		越前	3	6	2	7	5	11	5	10	6	11
		越前	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
近畿	若狭	伊志	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1
		志山	1	6	3	6	8	11	7	10	5	8
		大振	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
		河和	2	9	2	7	4	9	3	8	2	7
		紀播	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1
		丹丹	0	2	0	1	0	1	0	1	0	1
		丹丹	7	9	4	6	5	7	5	7	6	8
		丹丹	0	0	2	4	2	4	2	4	2	2
		丹丹	1	1	3	3	2	2	2	2	2	2
		丹丹	1	2	0	1	1	2	1	2	1	2
		丹丹	0	1	0	1	0	1	0	1	0	3
		丹丹	0	1	3	7	5	9	6	10	7	11
		丹丹	1	5	2	6	3	7	3	7	3	7
丹丹	0	1	1	3	1	3	1	3	1	3		
中国	但馬	因出	1	2	1	2	1	2	1	2	2	3
		石美	0	5	2	3	2	3	2	3	2	3
		備前	0	1	2	3	2	3	2	3	2	3
		備前	0	1	0	2	0	2	0	2	0	2
		備前	0	1	3	4	0	1	0	2	0	3
		備前	2	3	3	6	5	8	6	8	7	10
四国	阿波	讃岐	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
		予佐	0	2	0	2	1	3	1	3	1	3
		伊土	0	1	4	8	5	9	4	8	4	8
		伊土	0	1	1	2	0	1	0	1	1	2
九州	筑前	筑前	0	1	1	2	1	2	1	2	1	2
		筑前	0	1	1	3	1	3	0	2	1	3
		筑前	0	1	1	3	1	3	1	3	1	3
		筑前	1	6	1	7	1	7	1	7	1	7
		筑前	1	6	3	9	4	10	4	10	4	10
		筑前	0	2	2	4	2	4	2	4	2	4
		筑前	0	4	0	4	0	4	0	4	0	4
		筑前	0	2	0	2	0	2	0	2	0	2
		筑前	0	2	0	2	0	2	0	2	0	2
全 国		52	193	86	233	105	257	108	253	127	280	

表2 近江盆地内の藩領分布

	大溝藩	西大路藩	宮川藩	山上藩	堅田藩	膳所藩	彦根藩	水口藩	天領・旗本
高島郡	15,933					4,651			
滋賀郡			1,283		6,410	8,892			1,203
栗太郡	0					37,111			
野州郡	2,606	2,263	1,809	2,531					
甲賀郡			2,087	3,067		1,749		21,637	
蒲生郡		13,496	1,215	1,230				2,811	
神崎郡				3,296			1,336		
愛知郡			928				28,654		
犬上郡							61,710		
坂田郡				312			66,474	1,720	2,878
浅井郡				887			11,769		
伊香郡						1,616	14,991		
近江盆地内	18,539	15,759	7,322	11,323	6,410	54,019	184,934	26,168	4,081
近江盆地外	6,461	2,241	5,678	1,677	6,590	5,981	65,066	0	
所領合計	25,000	18,000	13,000	13,000	13,000	60,000	250,000	26,168	

『旧高旧領取調』による

表3 近江国の城下町および陣屋所在地の人口（明治12年）

集 落 名	近 江 国		
	男 子 人 口	女 子 人 口	総 人 口
大津	8,868	9,231	18,099
膳所	2,194	2,280	4,474
彦根	13,187	14,183	27,370
長浜	2,934	3,176	6,110
水口	2,439	2,551	4,990
正 寺	798	892	1,690
山 上	687	686	1,373
宮 司	330	318	648
大 溝	1,079	1,152	2,231

『共武政表』による

表4 近江国の士族人口と集落規模（明治13年）

近 江 国				
集 落 名	士 族 人 口	総 人 口	士 族 人 口 比	
大 津	334	18,269	1.8	
膳 所	929	3,819	24.3	
彦 根	9,569	21,929	43.6	
長 浜	50	5,966	0.8	
水 口	900	4,990	18.0	
仁 正 寺	175	1,690	10.4	
山 上	141	1,235	11.4	
宮 司	88	722	12.2	
大 溝	510	2,215	23.0	

『滋賀県物産誌』による

表5 大和国の城下町および陣屋所在地の人口（明治12年）

集 落 名	男 子 人 口	女 子 人 口	総 人 口
郡 山	7,103	7,241	14,344
小 泉	1,051	1,069	2,120
竜 田	1,055	1,024	2,079
松 山	1,119	1,096	2,215
芝 原	619	662	1,281
田 本	1,352	1,370	2,722
柳 本	1,227	1,238	2,465
御 所	1,981	2,091	4,072
新 庄	550	618	1,168
二 見 五 条	1,992	2,017	4,009

『共武政表』による

二〇%を超すのは大溝の場合のみである。大溝は町並が城下町的なたずまいをよく残していることでも知られていることを考えても、城下町的性格が強いといえるかもしれない。しかしながら、この結果から大溝が陣屋格の大名の居所として異常に大きな集落で、陣屋町としての特殊例であつたとの判断は不当であろう。近江盆地と同じように陣屋格の大名の多かつた奈良盆地の状況をみると、陣屋格大名の所在地である田原本・柳本などの典型的陣屋町でも、人口規模として大溝と同等ないしはそれを上廻るものがある。芝と新庄が一ランク小さいが、この二つの場合は特殊な事情があつた。芝の場合は近世中期に領主の織田氏が柳本に移動してしまつたことであり、新庄の場合も近世中期で桑山氏が廃藩となり、再び幕末になつて永井氏によりこの地区に陣屋が設けられたところは櫛羅であつたことである^⑧。

三 陣屋町の形態と構造

大溝陣屋町が築かれた場所は、比良山地を源流とする安曇川・鴨川などがつくる扇状地性三角州の南端に位置する。図2をみればわかるように、東側と南側は琵琶湖と内湖である乙女ヶ池に囲まれ、西側は地塁山地である比良山地の延長に当たる山々がそびえている。この地域の上流部は風化侵食を受けやすい花崗岩質でできているために土砂を大量に供給しやすい環境にある。そのために、河川に沿つての扇状地性三角州上には自然堤防などが発達する^⑩が、しかし、陣屋および陣屋町が位置する地形は概して平坦であり、目立つた起伏はない。また、隆起性の扇状地性三角州のため数段の段丘面が、この地域には発達しているが、西部の低位段丘面を利用して、日吉神社や大善寺・円光寺・瑞雪寺の立地がみられるものの、ほかに微高地を利用する陣屋町プランと関係がありそうな施設も存在しな

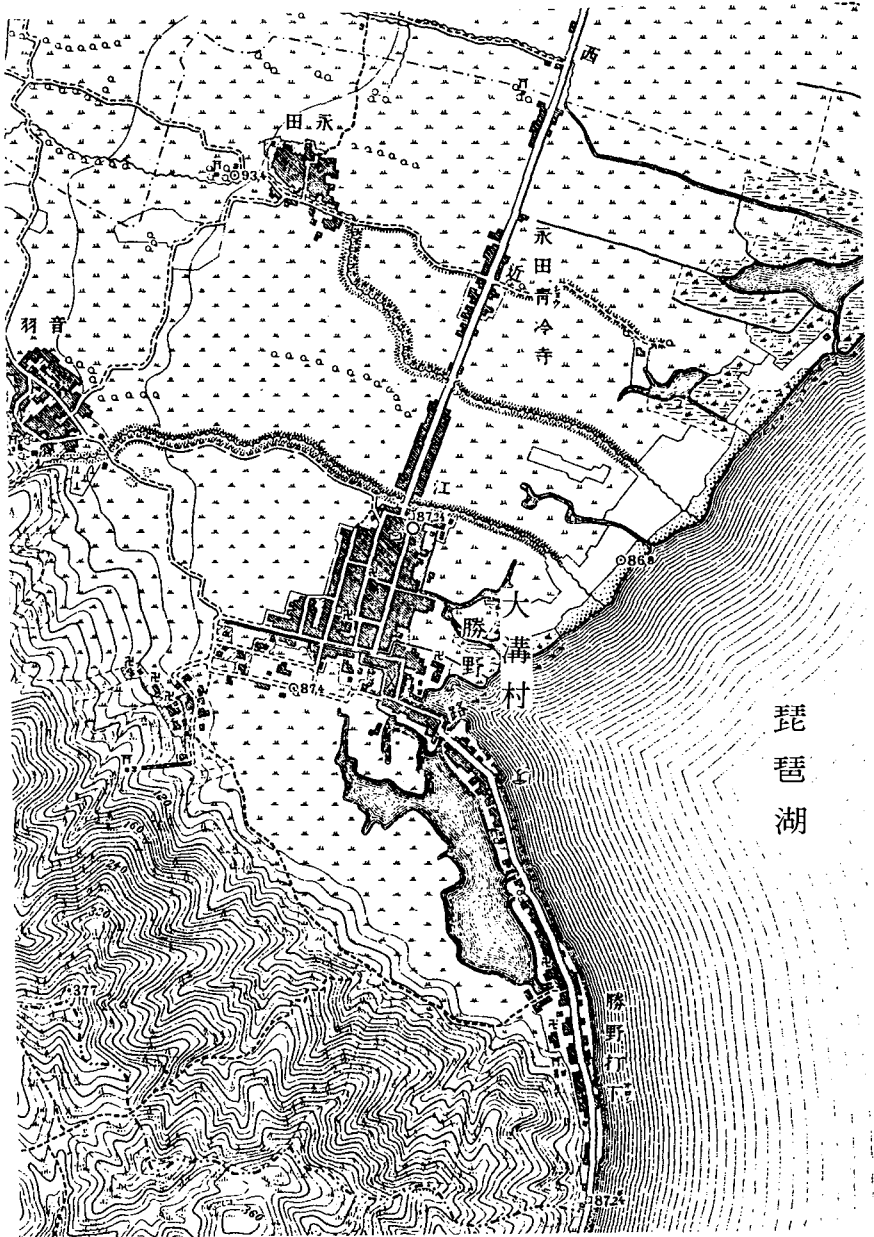


図2 大溝陣屋町付近の地形図（明治28年測図）

い。自然的条件から陣屋町の立地を規定しているという点で注目されるのは、扇状地性の地形の扇端に位置して地下水の湧水地点に当たることであろう。この扇状地性の安曇川三角州から鴨川三角州にかけては、等高線九〇メートルのところに湧水帯が存在するが、陣屋を中心とする列状の集落は、その湧水帯に立地しており、琵琶湖の堆積物の関係で悪水ができるころでは、近世に湧水帯から水道が引かれている。

大溝陣屋の所在する地に織田信澄によって城が築かれたのは、戦国期後半の天正六年（一五七八）のことである。もちろん、城といっても中世の城館であり、近世の城郭とは一線を画すものであったと思われる。町場の発達も近世のものと比較すると、極めて貧弱なものでしかなかったことが推察される¹¹。陣屋が置かれて陣屋町が再編成されたのは、元和五年（一六一九）大阪の陣の動功によって、高島郡内三二カ村と野洲内五カ村とに計二万石を与えられた分部光信によってである。それまで伊勢上野に居を構えていた分部氏は、表6に掲げたような四五名の家臣とともに入封し、大溝の陣屋町の建設に力を注いだ。織田信澄の築城から分部氏の入封までに、丹羽長秀・加藤光泰・生駒親正・京極高次などの多くの城主が交替で入封したが、その在城期間が短かったために、その後の陣屋町プラン（ないしは城下）の整備に与えた影響は少なかったと考えられる。また表7のように、分部氏の前封地上野の総人口は一六〇〇人余であり、五〇〇人余の土族人口を考えれば、大溝陣屋町の人口規模と似ていることは重要であろう。もともと分部氏の転封は、慶長一三年（一六〇八）に藤堂高虎が伊予から津に転封したことで、元和五年に徳川頼宣が紀州和歌山に封ぜられた余波であった¹²。すなわち、御三家である紀州和歌山藩と外様の雄藩である津藩に挟まれて、所領と防衛上の理由から分部藩は移封させられたのである。それはともかくとして、分部氏は、以後、明治までこの陣屋町を中心に高島郡内を治めることになった。

表6 元和5年(1619)移封時の分部氏の給人

以上、計、四十五人、六千三百五十五石	一、三百五十石	分部 庄兵衛	一、参百石	分部太郎左衛門	一、貳百石	恒川 平右衛門
	一、参百石	分部與治右衛門	一、貳百石	笠井 五左衛門	一、百七十石	前田 孫右衛門
	一、参百石	分部 九左衛門	一、貳百石	分部 善右衛門	一、百五十石	前田 小右衛門
	一、百五十石	別府 九右衛門	一、百三十石	岡林治郎右衛門	一、百貳十石	別所 弥左兵衛
	一、百五十石	別所 傳兵衛	一、百三十石	野呂 右衛門	一、百石	別所 喜兵衛
	一、百五十石	藏田 宗兵衛	一、百貳十石	小川 十右衛門	一、百石	別所 儀兵衛
	一、百五十石	分部 弥兵衛	一、百貳十石	牧 兵右衛門	一、百石	笠井弥五右衛門
	一、百五十石	別所 九郎兵衛	一、百貳十石	市川 五右衛門	一、百石	分部四郎左衛門
	一、百五十石	細野 勝太夫	一、百貳十石	別所 三左衛門	一、百石	分部太郎左衛門
	一、百三十石	鱧 七郎右衛門	一、百貳十石	長谷 清兵衛	一、百石	分部 傳十郎
	一、百三十石	鱧 道方	一、百貳十石	小川 嘉兵衛	一、百石	別所三郎右衛門
	一、百三十石	林 宇右衛門	一、百貳十石	杉田 四郎兵衛	一、百石	藏田 九太夫
	一、百三十石	小波 多久兵衛	一、百貳十石	御厨 七兵衛	一、百石	藤枝 半右衛門
	一、百三十石	湯浅 八左衛門	一、百貳十石	藏田 太兵衛	一、七十石	武野 源太夫
	一、百三十石	別所六郎右衛門	一、百貳十石	小川 理右衛門	一、切米十五石	大河内 源兵衛

表7 伊勢国の城下町および陣屋所在地の人口（明治12年）

集 落 名	男 子 人 口	女 子 人 口	総 人 口
桑 名	7,060	7,866	14,926
長 嶋	271	355	626
菰 野	227	252	479
亀 山	1,386	1,453	2,839
神 戸	1,318	1,403	2,721
安 濃	5,121	5,469	10,590
久 居	444	1,959	2,403
松 坂	4,851	5,290	10,141
田 丸	602	640	1,242
上 野	800	849	1,649

『共武政表』による

陣屋町の形態は次ページに示した図3のように、北国街道沿いに町場を発達させる。これを大きく分けると、小字で「市内」・「港」・「大平良」などと呼ばれる三つの地区と、城および「郭内」と呼ばれる支配階級である藩主と士族が集中して居住する地区とからなっていた。

小字「市内」・「港」・「大平良」の三地区は町屋地区であり、後者の小字「郭内」は侍屋敷地区に当たる。それぞれは、さらに細かい地区の町名に区分され、例えば、小字「市内」の中には蠟燭町・職人町・西町・南市本町・十四軒町・新庄中町・新庄本町・今市中町・今市本町・新庄新町が、「港」には六軒町・長刀町・船入町・江戸屋町が、「大平良」には伊勢町などが、その中に含まれている。

このうち、六軒町・長刀町・江戸屋町・蠟燭町・職人町・十四軒町は大溝六町と呼ばれ、分部氏が伊勢上野から大溝に転封したときに、同時に移住した商工業者が居住した町である。旧来から東部に散在していた町屋を本町・新町・中町・西町の町通りを基軸とした線に、新しい移住者の町大溝六町を取込んで、従来の町よりも一回り大きい陣屋町が出現した。

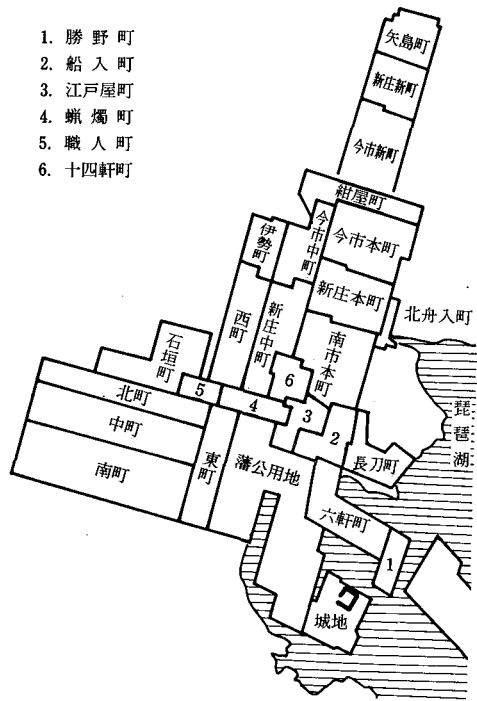


図3 大溝陣屋町地域区分図

一方、陣屋自体は内堀がめぐらされて防衛され、小字「郭内」の侍屋敷地区も外堀によって守られて惣郭を構成している。惣郭の範囲に当たる小字「郭内」は城地・藩公用地・東町・南町・中町・北町からなり、東西四町余、南北二町余を占めるプランであったことが「享保年間城下町絵図」からも知ることができる。士族の居住区である侍屋敷地区と町屋はかなり明確なプランによって分離させられていた。

なお、侍屋敷地区は丘陵と湖がまじわり平地が狭まるところにあり、北国街道の押えの役割に適した場所にある。また、水利面からみると、前述したように、陣屋町の立地する場所は湖岸に近接するために鉄気をおびて悪水であるが、それを補うための水道が日吉神社の方から引かれている。町屋方面にも水道が設けられているが、水源地を異にしている。

おもな士族の分布は、元和年間の移封当初から小字「郭内」の侍屋敷地区に集住し、幕末まで固定されるが、「享保年間城下町絵図」によって、すでに享保年間に惣郭外にも居住していたことがわかる。惣郭内の侍屋敷地区の移封当時の四五軒はほとんど移動もせず、幕末を迎えるが、それらの家の分家、例えば、前田・野呂・笠井などの名

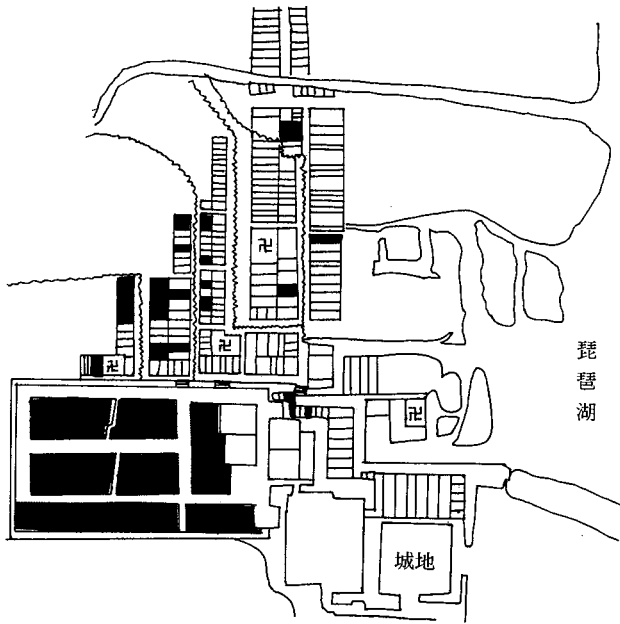


図4 大溝陣屋町内の士族分布

がみられる。後世の作であると思われるが、「元和五年移封當時家中屋敷割図」によって算出すると、惣郭内に居住する者の石高平均は一四〇石であり、この藩としては惣郭内に比較的高い身分もしくは家格の者が居住していた。それに対して惣郭外の士族の分布は、西町・伊勢町・職人町に集中し、西町では総戸数二四戸のうち一三戸が、伊勢町では総戸数一戸のうち一戸すべてが、職人町では二八戸のうち六戸が士族の屋敷地である。新庄中町・今市本町にも二戸ずつの分布がみられる。惣郭内の侍屋敷地区に対して、「市内」に居住する士族の階級は一〇石未満の低い石高ないしは石高が高いが地元で家臣に取立てられた者が多いのが特徴である。城を中心とした階層性の高い住居パターンが見出されよう。しかも、居住パターンは極めて固定的で役職の変化などの移動はほとんどなかったと考えられる。しかしながら、明治の迅速測図から推定すると、階級の高い藩の重職が住んだ郭内の方が崩壊破壊が早かったことは、城下町の一般的特性とあわせて検討の余地があると思われる。

四 ま と め

幕藩体制において畿内のおよそ半分は幕府に直接統轄された天領であった。そして、残りの半分が二〇余の大名によつて分割されていたわけである。また、一つの村が旗本・代官・大名などいくつもの領主に統治される場合さえもあつたといわれる。徳川時代を通じて畿内が行政的にかなり分断された所領から構成されていたという事実は、この地域の都市的集落の成立を特色づけるうえでも重要であるとこれまで考えられてきた。そして、この考えは非領国地域の都市的集落として、陣屋格大名が本拠地とする町、すなわち陣屋町などを考察するうえで、その性格の捉え方を規定していたのである。そのなかで、陣屋所在地は非都市的集落として位置づけられることが多かった。

本稿で取上げた大溝の場合は一事例にすぎず、他の陣屋所在地でも同じことがいえるかどうかは疑問である。それは立地した時期も異なるであろうし、領主の置かれていた政治的背景も異なるために一様に捉えることは難しい。そのため、城主に準じる小大名の領域の中心といつても大溝のような計画的な陣屋町が建設される場合があるかと思えば、中島義一の一連の報告や大越勝秋の研究^⑤で指摘されるような陣屋村ともいうべきものまで幅広いものが誕生することになったのである。今後の課題としては、変動の大きい陣屋所在地のあり方、存在形態などを考えていくことが重要であろう。

文献・註

(1) 一九七〇年代までの城下町の研究展望については 矢守一彦『城下町研究ノート』古今書院、一九七二に、それ以降の動

向については武藤直『歴史地理学における封建都市研究』『日本の封建都市（第一卷）』文一総合出版、一九八二、に詳しく紹介している。

- (2) 豊田武『日本の封建都市』岩波全書、一九五二、八九〜九八頁
- (3) 藤岡謙二郎『日本歴史地理序説』塙書房、一九六二、一九四頁
- (4) 藤岡謙二郎・山崎謹哉・足利健亮編『日本歴史地理用語辞典』柏書房、一九八一、三〇〇〜三〇二頁
- (5) 中林 保『近世鳥取藩の陣屋町』人文地理二六―四、一九七四
- (6) 以後、本稿では城持大名の城主格に対して、大名でありながらも城を持たず、陣屋が封地の本拠地となる大名を陣屋格と称することにする。
- (7) 中島義一『一万石大名の城下町（第一報）』新地理二〇―二、一九六二
 なお、中島には以下の陣屋町あるいは陣屋格大名についての一連の報告がある。
 「一万石大名の城下町（第三報）その一」新地理一三一―一、一九六五
 「一万石大名の城下町（第三報）その二」新地理一三―三、一九六五
 「一万石大名の城下町についての一、二の資料」歴史地理学紀要七、一九六七
- (8) 『共武政表（明治十二年）』柳原書店、一九七八
- (9) 『新庄町史』新庄町教育委員会、一九八四
- (10) 『滋賀県の自然』滋賀県、一九七九
- (11) 『高島町史』高島町役場、一九八三
- (12) 『安芸町郷土史』安芸町教育委員会、一九七八、六九頁
- (13) 大越勝秋『泉州伯太陣屋村の研究』地理学評論三五―九、一九六二